

# 令和7年度 八王子市立南大沢小学校 学校経営報告書

校長 安田 尚民

## ◇学校経営の基本理念

すべての教育活動を通して「社会の中で自立して生きるために必要な力の基盤」となる力を育み、子ども達が、持続可能な社会の担い手として人間性豊かに成長することを願い、保護者、地域と共に学校教育・運営を進める。学校開校40周年を経て、41年目の新しいスタートとして、「子供の成長と多世代交流」という縦軸と「豊かな地域資源を生かした持続可能な地域協働」という横軸の交点に学校を据え、「街づくり」と連動した「笑顔を生み出すひと・もの・こととの交流」を実現する場としての学校を、子ども、学校、保護者、そして地域が協働して創っていく。「仲良く、元気で、頑張る子」という南大沢小学校の学校教育目標を具現化するために、八王子市教育振興基本計画に基づき、「知・徳・体」のバランスの取れた児童を育成することを目指す。学校づくりのテーマは、引き続き「すべての子供が笑顔になる学校」とする。「笑顔」とは、「児童一人一人が自分の良さに気づき、新しい課題に挑戦する原動力となるものである」と捉え、あらゆる場面で大切にしていく。

本校着任 3 年目となり、構想してきた「街づくりと連動した笑顔を生み出すひと・もの・こととの交流」（子どもの未来づくりと南大沢ブランディング）が教育課程の中で具体的な形を現してきた。発達段階に応じて、小学校 6 年間という長いスパンで地域社会の様々な教育資源と直接交流し、自分が成したい事、成せたことを自覚していくことは、八王子市が最重要課題として位置づけ取り組んでいくキャリア教育の視点からも、非常に有意義な教育環境の充実につながっていると考える。一方で、不登校傾向のある児童に対する対策はまだまだ道半ばであり、「すべての子どもが笑顔になる学校」としてその解決により一層注力していく必要がある。

## 1 目指す学校像

～『すべての子供が笑顔になる学校』～

- (1) 学年の垣根を越え、互いの存在を認め、関わり学び合う学校
- (2) 上級生が下級生の手本となり、下級生が上級生に憧れを抱く学校
- (3) 失敗を恐れず、挑戦する姿勢をみんなが応援する学校
- (4) 地域に愛され、地域に誇りと愛着を感じる学校

目指す学校像は、小規模校の強みを活かし、弱みを克服するために、学年学級への所属感を抱かせると同時に、異学年交流、縦割り班での活動に主体的に参加し、人間関係を幅広く捉えることのできる環境を目指した。全校朝会、その他さまざまな場面で学年の枠を超えた交流の意義を伝え、上級生の自覚、下級生の憧れなどが育っていることを感じる。特に展覧会の共同作品の制作や落ち葉拾いなどの奉仕活動を縦割り班の単位で実施したり、学習発表を異学年に向けて行ったりすることで、児童の人間関係が広がり、上級生の自覚が深まった。学校評価アンケートの自由記述からも「異学年交流の良さ」を評価する声が多く、目指す学校像が保護者や地域に少しずつ浸透していることを実感している。また、地域の教育資源を積極的に活用し、人やもの、ことと触れ合うことによる「シビックプライド」（地域への誇りや愛着）を醸成することは、学齢期に育むべき大切な機会であり、教職員を含め「感謝」の思いで地域とつながれるように取り組んだ。

## 2 目指す児童像

～「知・徳・体」のバランスの取れた児童～

- 仲良く(徳)…進んで協力し、認め合う、思いやりのある児童
- ◎元気で(体)…体を動かすことを楽しむ、気力・体力・意欲のある児童
- 頑張る子(知)…好奇心をもち、よく学ぶ、実行力・継続力のある児童

学校評価では「学校教育目標」の認知について、児童の90%、保護者の91%の肯定的な回答をいただいた。低学年の児童にもより分かりやすく「ひらがな表記」のシートを作成し、各学級の目標にも反映させやすいような工夫を行った。運動会、展覧会などの全校スローガンにはこの「学校教育目標」や「すべての子どもが笑顔になる学校」という目標が反映され、目標の共有が浸透していると感じさせた。学級通信、特別支援教室のお便り、日本語学級通信などでは、この目標に向かって取り組む児童の日常の報告を頻繁に発信し、学校、地域、家庭が三位一体となって児童の育成に主体的に関わる風土が整ってきた。

### 3 目指す教師像

～児童にとって最も身近で影響のある教育環境は、教師である～

- (1) 教育に対する熱意と使命感をもち、率先垂範、プラス思考で努力する教師
- (2) 児童と共に学び成長しようとする、豊かな人間性と思いやりのある教師
- (3) 児童理解と授業改善に努め、子供のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる教師
- (4) 公務員・社会人としての常識をもち、組織人として積極的に協働し互いに高め合う教師

単学級の学校では教員数も限られ、特に学級担任は学年主任として学級事務のすべてを担う必要がありその負担は大きい。経験と熱意があっても、その資質を100%発揮できる環境整備は喫緊の課題である。本校では在籍する教員一人一人の特性や得意分野を生かした交換授業や毎学期の授業観察の機会を生かした OJT に力を入れ、教員相互が切磋琢磨しながら総合的な教師力を向上できる取り組みを進めている。また本年度から「副担任」制を整備し、専科教員を学年の副担任に位置付け、保護者会への参加、児童理解の支援などの体制を目指した。次年度からは副担任の業務内容を確認し、具体的に児童に関わる機会を増やして組織全体で児童の育成に関わる学校を目指していきたい。また、一昨年度の事案とはいえ、サービス事故案件での懲戒処分が下り、保護者や地域の信頼を裏切る結果となってしまったことは非常に遺憾である。組織全体で服務規律厳守の誓いを立て、信頼される組織づくりを構築していく。

### 4 中期的目標(令和7年度・8年度)

- (1) 学力の定着と向上
- (2) 心と身体の健康づくり
- (3) 特色ある教育活動の取組(多世代交流、小中一貫、特別支援教育の充実)
- (4) 地域・家庭と連携した協働的な学校づくり
- (5) 組織的な学校経営と働き方改革の両立

令和7年度、令和8年度の2年間の計画では、以前の目標から一部変更し、「保幼小中連携」から「多世代交流」へ、「開かれた学校づくり」から「共同的な学校づくり」へ、「職務の適切な執行」から「働き方改革との両立」へ、と表記を改めた。時代に即し、新しい教育課題への対応を含めた学校の経営ビジョンの実現のために、重点となるそれぞれの取組の進捗について振り返る。

#### ◇令和7年度の重点目標と方策 『すべての子供が笑顔になる学校』

- 1 学力の定着と向上 ～個別最適な学びと協働的な学びの実現～

- (1) 「できた、分かった、高まった」の実感ある学び(主体的、対話的で深い学びの実現)
- (2) 単元別交換授業や教科担任制(一部)の導入による全校的な指導体制の構築
- (3) 「自主的自発的な学びの実現」を目指した創意工夫ある授業改善(校内研究の充実)
- (4) 読書活動の活性化のための環境整備(時間の確保、蔵書の充実、意欲を高める企画)

(1) OJTの授業観察を全教員が年3回実施し、ICTやAIを活用した授業改善の研修会を複数回設けた。児童と保護者を対象にした学校評価では、「授業の工夫」について9割を超える肯定的な回答を得ることができた。八王子市の学力調査の結果、4年5年6年の国語、算数について、基礎、応用双方の分野とも、全ての内容で市の平均を上回り、特に応用分野においては最大で22.9ポイント上回るなど学力層全体の底上げができた。

(2) 小規模単学級の学校にとって教科担任制を導入することは困難である。授業の割り振りができても、複数学年にまたがった授業準備と児童理解が必要であり、一つの授業を複数回実施したり、空き時間を設定できたりする、と言ったメリットが享受できない。そのため本校では校内研究に「教科担任制」に向けた検討部会を設け、学期、年間で実施目標回数を定めて単元別交換授業を計画した。実施率は100%に届かなかったが、全校体制で児童の指導に当たることでの児童理解や授業の質的改善の成果があり、次年度に向けて課題を整理することができた。

(3) 学習指導要領の学力観を踏まえ、本校の児童の実態調査に基づき設定した校内研究の主題は「自主的・自発的に学ぶ児童の育成」であった。毎学期に実施した全教員による授業公開では、この主題を意識した授業づくりを行い、成果や課題を共有することで全体のブラッシュアップを図ってきた。市教委教育指導課の指導主事に講師を依頼し、研究を進める中で、研究主題の定義の明確化、南大沢小学校の特色を生かした指導の工夫などについての課題を指摘され、次年度引き続き同主題での校内研究を継続していく。

(4) 毎週実施している地域ボランティアによる「読み聞かせ」、秋の「読書週間」の内容を工夫し、児童の読書啓発につながるよう努めた。また地域の私設図書館「ともだち文庫」の閉館に伴い、蔵書の寄贈と書籍の寄付をいただけることになり、本校の図書室蔵書のリニューアルや拡充が進むことになった。次年度は「八王子読み聞かせの会」と「ともだち文庫スタッフ」の連携による、国語の授業の実施を計画している。

## 2 心と身体 の健康づくり

- (1) 道徳教育の充実(地域を題材とした教材を積極的に扱う年間指導計画の実施)
- (2) 豊かな国際感覚と、高い人権感覚をもつ児童の育成
- (3) 個に寄り添った生活指導、教育相談の推進(いじめの未然防止と早期発見、SCによる全員面談)
- (4) 外遊びの奨励と健康増進(運動する楽しさを知り、進んで体を動かそうとする児童の育成)

(1) 校長が市内小学校(第四小学校)の校内研究年間講師を務め、その研究資料をOJTとして校内にも展開した。特に評価のとらえ方、AIを活用した地域教材の作成について研修会を実施し、道徳教育の質的向上を目指した。道徳授業地区公開講座には地域、保護者40名以上が参加し盛況だった。令和8年度は全学年の年間計画に郷土教材を設定した。学校評価では児童の95%が「自他の大切さの指導」について肯定的評価をした。

(2) ミャンマーの写真展を校内で実施し募金活動を実施するユニセフ募金に合わせ、JICAの派遣経験のある教員赴任地ガーナについての紹介をする等の取組を行った。本年度は転入生に外国籍児童が多く、文化習俗の違い、宗教の違いなどについて考える中で、共生社会の実現に向けた素地を育んだ。また「人権の花」運動に参加し、全学級が花の栽培を通して人権感覚を磨き、花の栽培と平和について考えるまとめを行った。

(3) 毎週月曜日に実施しているいじめ問題対策会議では、実態報告や対策の検討、SSWやSCを講師にした研修会、ケース会議など内容の充実を図り、個に寄り添った生活指導を行った。フレンドシップタイムとして、毎学期放課後の遊び開放時間を設定し、教員と子供が学年を超えて遊べる時間を設けた。しかし、後期の学校評価では

「いじめ防止の対策」について76%という評価だったので、今後学校だよりに項目を設けて報告する等、取組を発信する機会を充実させる。

(4)「体力向上」を重点課題としてスタートした令和7年度だったが、6月の体力調査の時点では、多くの項目で平均値を下回る結果となった。学校評価の肯定的評価も73%と低い水準である。体育の授業改善、身体を動かす楽しさの認知、体力の向上と怪我の防止などを目指して体育委員会の児童が主体的に関わり、全校で「縄跳びタイム」「長縄チャレンジ」「全校逃走中」(鬼ごっこ)を実施したり、昼休みに外遊びを奨励する「外遊びタイム」の時間を設けたりする等、外遊びを盛んにする取組みを進めた。また生活リズム調査を11月に実施し、スクリーンタイムや朝ごはんの実態調査を行い、個別の指導や家庭への啓発に役立てた。次年度も引き続き重点課題として取り組んでいく。

### 3 特色ある教育活動の推進

- (1) 多世代交流、幼保小中連携、小中一貫教育の計画的な推進
- (2) 異学年交流、縦割り班活動の推進と進展
- (3) 特別支援教室拠点校、日本語学級拠点校を活かしたインクルーシブ教育の推進
- (4) 近隣の大学や諸機関と連携したESDの推進(環境保全、共生社会の実現)

(1) 保育園、幼稚園、柏木小学校、南大沢中学校、ヤマザキ動物看護大学、地域の企業、地域の高齢者等との連携した授業を全学年が計画し、前年度の実績を踏まえより効果的で双方にメリットのある交流を目指した。また小中一貫教育の取組(走り方教室、運動会、合唱祭への参加、数学科教員の乗り入れ授業など)の内容は学校だよりに毎月コラムを設け、保護者や地域に発信した。インフルエンザの流行等により3学期は一部中止するものもあった。

(2)「目指す学校像」の柱にもしている異学年交流は行事、特別活動、授業などあらゆる場面で実現可能性を検討実施してきた。登下校や休み時間の遊びでは、異学年が混じって過ごしている姿が常態化し、一人一人の顔と名前が一致した関係作りが進んだ。特に下級生の言葉遣い、礼儀等について課題があり、今後全校で取り組んでいく。

(3) 特別支援教室の巡回教員による理解教育(特別支援教室で行っているSST、各種教材を体験する等)を全学年全学級で実施し、個別のニーズに応じた教育の充実、理解啓発を図った。また日本語学級を併設していることを活かしたインクルーシブ教育の推進を計画し、休み時間の交流、日本語学級紹介集会、日本語学級在籍児童による学習発表会を実施した。日本語学級への障壁が下がり、児童の国際理解が深まった。

(4) 都立小山内裏公園のレンジャーの協力を得て、本年度も里山再生活動への参加を中心とした4年生の学習を行った。ヤマザキ動物看護大学との連携では、補助犬との交流の他、学生が企画する特別授業への参加など、児童が主体的に参画できる取組みが進展した。地域の協力を得ながら取り組んでいる「南小米」のコメ作りでは、メダカの飼育を田んぼで行い、地域に販売した収益でチューリップの球根などを購入し、学校の緑化促進につながる活動など、新たな取組みをスタートさせた。

### 4 地域・家庭と連携した協働的な学校づくり

- (1) 豊かな地域資源(人・もの・こと)を生かした持続可能な地域協働を進める
- (2) 開校40周年を経て、伝統を受け継ぎ、郷土と学校に対する愛着を更に深める
- (3) 地域防災組織と連携した、体験を重視する実践的な防災教育を充実させる
- (4) 学校から積極的に情報発信を行うと共に、児童の地域行事への主体的参加を促進する

(1)「子どもの未来づくりと南大沢ブランディング」というスローガンのもと、「子供の成長軸と多世代交流」という縦軸、「豊かな地域資源を生かした持続可能な地域協働」という横軸が交差するハブとして小学校を位置づける

ランドデザインを描いた学校づくりは、約2年間の実践期間を経て、教育課程上への位置づけが明確になり、学校の特色として継続していく目途がたった。機会があるごとに校長からも地域、保護者、企業、大学等へプレゼンを行い、学校の目指す姿の共有を図った。学校経営方針の認知については、学校評価で92%の肯定的評価を得た。

(2) 昨年度の開校40周年記念式典の内容は、職員室前の廊下にパネル掲示し、開校記念日前後に児童に紹介する等レガシーとしての継続に取り組んでいる。一方、周年記念歌やマスコットの活用などは十分でなく、今後課題が残る。「どんぐり学校」としてコナラの幼木育成プロジェクトも、気候変動などの影響を受け十分には機能していない。次年度特別の教科道徳の教材として、全学年に郷土教材を取り入れる等、地域愛を深める取り組みを進展させる。

(3) 昨年度よりスタートした秋の地域防災訓練、宿泊訓練を継続、発展させる形で実施した。都立大学社会学部との連携で、防災ビデオの視聴、宿泊訓練における炊き出しに中学生が主体的に参加する、高学年児童は児童のみの訓練参加も可能とするなど、地域防災団体と連携しながら、充実させることができた。

(4) 地域行事の情報発信、参加促進はポスターの掲示やオンライン通信などで行った。クリーンデーの参加では、南大沢中学校区でも最も多い参加者となるなど、地域行事への関心も比較的高い。しかし、夏祭りや音楽祭などへの参加は少なく、地域行事の主体者としての意識をより一層啓発する必要がある。また運動会などの日程との重複もあり、昨年度は参加できた「屋台選手権」には参加できなかった。次年度以降の検討課題となった。

#### 5 組織的な学校経営と働き方改革の両立 ～教職員のウェルビーイングと活力ある学校～

- (1) 経営支援部、企画調整会議の機能を充実させた組織的な校務運営
- (2) 教師力、授業力向上を目指した校内 OJT と校内研究・研修の活性化
- (3) 校務運営全般におけるSDGsの視点に基づいた環境意識の向上
- (4) 人権感覚を高め、サービス事故を未然防止する研修の充実
- (5) 働き方改革の推進と教職員の自己実現による活力ある学校づくり

(1) 経営支援部、企画調整会議の検討内容は、職員会議前の実施によって議題の整理を行い、また検討、決定事項等について、副校長が校務支援の掲示板に公表することで、透明性の高い組織運営につながった。会計事務について、一部不備があり、返金が必要になるなど、ヒューマンエラーを減らすための管理体制を充実させる必要がある。

(2) 毎学期の授業観察を、教員を対象にしたOJTと位置づけ、校内研究の主題を意識した計画を作成し授業後のフィードバックを授業改善の機会とした。クロームブックのソフトの利活用、AIを活用した授業づくりなどについては、操作や情報に優れた教員が率先して研修会を企画し、不定期にもOJTの内容が充実した。ICT支援員の活用については、事前の支援依頼などが十分に機能しておらず改善の余地がある。「授業の改善」(ICT含む)についての学校評価では9割以上の肯定的な評価を得た。

(3) 会議は原則ペーパーレスで実施しており、今年度は学校からの発信文書についてもほぼオンラインでの配信(学校だより含む)に切り替え、紙資源の節約などに努めた。しかし、校務内容によっては会議後に印刷するものも多く、学校だよりの内容周知のためにも紙面配布の方が効果的なものもあるため、次年度はそのメリットやデメリットを見極め、アナログとデジタルの併用を追求する。

(4) 一昨年度に発生した本校教員のサービス事故についての懲戒処分が確定した。地域や保護者、児童への信頼を裏切る結果になり組織の長として防止できなかったことに対する慚愧の念に堪えない。教育委員会の全面的な協力も得ながら臨時保護者会を実施し、サービス事故の経緯、児童の心理的ケア、再発防止策などについて説明したが、実際のサービス事故ゼロを継続することが信頼回復への道筋と考え、取り組んでいく。今年度は管理職、主幹

教諭による服務研修を毎月実施してきたが、次年度は全教職員が年間1回以上研修主催者として関わりながら、服務厳守の意識を高め組織倫理の向上を図る。

(5) 年度初めに全教員の持ち時数を週当たりではなく年間当たりで算定し、その数値を基にした授業時数の平準化を進めた。具体的には時間割上の専科をはじめとする担当枠は、原則年間を通して担当することとし、年間時数を超えた分についても授業担当者として関わる体制を整えた。特別支援教室のグループ指導の教員体制、連絡ファイルの返却回数の変更などを通じ、教材研究や児童理解の時間確保につなげた。学校行事には特別支援教室の巡回教員、日本語学級教員の参加も原則とし、マンパワーの充実を図った。有給休暇の15日間取得、平均時間外勤務時間を25時間以下にする、などの目標は達成されつつあるが、時間外勤務が45時間を超える教員も複数おり、一層の働き方改革を進める必要がある。次年度は時間講師の活用、副担任制度の確立を進め、教職員のメンタルヘルスを進め自己実現の達成につなげたい。